



創立 2011年6月17日
SAITAMA UKISHIRO
JAPAN

埼玉浮き城プロバスクラブ

2022,3,18 発行
No. 129



例会日 毎月第3金曜日 ホテル ガーデンパレス 熊谷市佐谷田 3248 TEL048-525-7777
事務局 〒360-0823 埼玉県熊谷市榎町 106 (幹事 岡安眞也方) TEL・FAX 048-521-3359
会長 根岸 友憲 副会長 木島 隆夫 幹事 岡安 眞也 情報委員長 椎橋 俊夫

本日のプログラム

第128回 通常例会

国歌斉唱・プロバスソング斉唱(プロバス賛歌)

会長挨拶

幹事報告

委員長報告・同好会報告

会長 根岸 友憲

幹事 岡安 眞也

新春祝いの舞

バースディ報告と会員スピーチ

ハッピーボックス披露

閉会

西川 扇由女(大澤由子)

1月 安部節子会員他 8名

2月 清水孝男会員他 5名

例会委員 森田 義弘

例会副委員長 田口覇洲男

会長スピーチ

会長 根岸 友憲



皆様こんにちは

今年に入り初めての例会が埼玉浮き城プロバスクラブ3月例会になりました。冬の季節も過ぎ春の訪れを感じる今日この頃です。これから動植物を始め万物の生き物が活発に元気よく活動します。

プロバスクラブにとっても、久しぶりの例会になります。さぞかし会員の皆様方も待ちどろしくお思いだった事と拝察いたします。

新型コロナウイルスの蔓延によりいろいろの活動が思うように開催できない状態が続いておりましたが、これからは以前の活動を取り戻せることを信じております。

人が集い交流するこの第一歩が否定され、日常、人と人が合うというごくあたりまえのことが危険視され制約される社会はとても正常とは思えません。しかしながら、現在この事が新型コロナウイルスの世界中の蔓延です。

埼玉浮き城プロバスクラブも3月例会のメインイベントとして、長らく延期しておりました恒例の西川扇由女師範の新春の舞を披露していただくようお願い致しましたので楽しい例会をお楽しみ下さい。又本日のプロバス例会に興味を持っていらっしゃる4名の方を招待しております。

埼玉浮き城プロバスクラブは、楽しい会話と自然体での人と人との飾り気のない交流、多彩な才能を生かし人生を経験された方々の集まりと思っております。世間常識も一流です。どんなクラブとも勝るとも劣らない気品あるクラブに、この10年間で築き上げられてきたと思っております。

これからも、これらの精神を思い執行部でクラブ運営を行ってまいりますので皆様方のご指導お願いいたします。

会員投稿



零戦と大和

木島 隆夫

60年代、少年雑誌の巻頭口絵で屢々登場したものの、大東亜戦争で活躍した航空機や艦船があった。先進の科学技術を予見した航空宇宙の想像パノラマもよく掲載され、子供心に心躍る熱い思いで眺めた記憶がある。人気漫画の中に戦時中の物

語を描いた作品が散見し(ゼロ戦はやとや紫電改のタカなど)、一方、テレビ番組にも戦時ドキュメンタリーや記録映画、「戦友」などのドラマ放映等、自然とそれらに対する興味や関心が芽生えていったように思う。月刊雑誌「少年」などに小松崎茂氏が描く空中戦や怒濤を越える連合艦隊の雄大な姿等々、精緻でダイナミックな水彩画に羨望の眼差しを向けたものである。

時代は何時しか移り変わり、現在の子供達の興味関心は、マイコンゲームなどIT分野に席卷されてしまった観が強い。かつてのアニメ番組

(2) 埼玉浮き城プロバスクラブ会報

「スーパージェッター」の世界が一部現実化してしまった現代では、ある意味当然といえるかも知れない。

膨大なデータを縦横無尽に、しかも瞬時に処理しながら、全地球的規模で展開される現代の軍事環境は、その領域を宇宙空間にまで広げている。戦時中、弾道計算の必要性に端を発し開発がスタートしたコンピューターの出現から僅か数十年、驚異的な科学技術の発展である。かつて搭載重量軽減を図るために、性能が一定しない無線機を降ろしてしまった零戦搭乗員の悲哀に思いが至り、今更ながら同情を禁じ得ない。

欧米列強に伍して死闘を繰り広げた大東亜戦争、当時の日本人が持っていた科学技術の全てを結集して生み出された零戦と戦艦大和こそ、不滅の日本精神を体現した象徴的遺産といえるかも知れない。と同時に、戦後のものづくり大国の基盤を担保する貴重な経験と成果として、今なお記憶にとどめておく必要があろうと確信する。

日中戦争の初陣に始まり、真珠湾攻撃の輝かしい雄飛、その後のインド洋太平洋作戦を経てフィリピン、沖縄戦での特攻によって終焉した零戦の生涯であるが、昭和12年に海軍の要請により三菱が試作した十二試艦戦から始まり昭和15年制式化され零式艦上戦闘機が所謂零戦である。昭和15年が皇紀二千六百年に当たるため零式と名付けられた。因みに一式戦闘機(隼)、三式戦闘機(飛燕)、四式戦闘機(疾風)等、制式採用された年を正式名称に冠する。現在の自衛隊装備兵器(国産)も一部その伝統を引き継いでいる。

零戦の新機軸と先進性は随所に見られる。先ず、極限にまで機体軽量化を図ったこと。その目的は長大な航続力と空戦格闘能力の実現である。機体を一体化したモノコック構造とし主翼桁材料に住友金属が開発した超々ジュラルミン合金を、外板に沈頭鋏を採用、主脚をスマートで強度十分の引き込み脚、キャノピーは密閉涙滴型など、様々な工夫と先進技術を採用し五百キロを超える最高速度を実現した。そして、抜群の運動性能により格闘戦に引き込めば、一時期無類の強さを発揮したと聞く。撃墜王坂井三郎氏は長大な航続距離能力を高く評価していたようである。当時の艦上戦闘機で三千キロの航続能力を持つ機体はなかった。しかし、その長所は半面短所ともなった。軽量化の為に防弾鋼板等の搭乗員防御を犠牲にしたこと。強力なエンジンに頑強な機体と防御力で搭乗員の生存性を優先しながら開発を進める米軍の用兵思

想は、旧軍のそれとは対極にあったといえる。千馬力のスリムな栄エンジンを搭載し芸術的ともいえる流麗で瘦身な零戦と二千馬力で武骨なF6Fヘルキャットとは、その違いは鮮明である。そこには当時の工業力と技術力の格差が厳然と存在したことは確かだが、それ以上にアメリカ流のプラグラティックな合理主義と日本独特の美意識と精神主義が兵器製造の根底に流れていたものと解せよう。

その思想は、戦艦大和の建造並びに運用と結末に如実に現れていると思う。軍縮条約の桎梏から解放された直後に起工、秘密裏に建造された大和は、昭和16年12月竣工、連合艦隊に編入された後3年半に及ぶ大戦中顕著な戦果は皆無、昭和19年10月捷一号作戦のサマル沖海戦などごく限られている。大鑑巨砲主義信奉の申し子と揶揄される大和(同型艦武蔵)は、当時の造船技術の粋を集めて実現した最大戦艦として歴史に残る。62,000トンの基準排水量に、1.5トンの主砲弾を42km射程可能の四十五口径四十六センチ三連装砲塔を三基、舷側410mm、甲板200mmの重装甲、15m測距儀等々攻撃力防御力共世界最強の戦艦だった。しかし、建艦時の運用思想に対し、その後の海上戦様相が変化する中で活躍の場を失ったとよく言われる。そして、昭和20年4月、軽巡矢矧、駆逐艦8隻を随伴した沖縄特攻の往路、艦載機による集中攻撃によって九州南西海域にその巨体を没し現在に至る。二千七百有余名の英霊と共に。

私は戦後生まれで先の大戦についての実体験はないが、民族が共有する歴史とその記憶に思いを馳せながら生きていくことは大変重要なことと認識している。先人たちが国の名誉と発展を願い、持てる英知と技術を結集して生み出した「零戦と大和」、栄光の陰に幾千幾万もの悲劇が横たわっていること、その尊い献身と犠牲の上に今日の日本があることを決して忘れてはならないと改めて思う。合掌。

